



鹿沼の自然・栃木の旅

会報第51号

(2018年4月)



馬返を出づる頃、雨はらはらと落ちしが、間もなく止み、春雲綿の如く此
処に巻き彼処に舒び、其間より云う可からざる暖かき匂を含める薄き
桔梗色の空を漏らしぬ。

路は深沢の峽に入りて、大谷川の水の美云い尽し難し。大谷川——川
と云わんよりは、寧ろ連続せる飛瀑とも云わん。

徳富健次郎『自然と人生』より（詳細は12頁から）

小さな旅クラブ 鹿沼



☪ 本号の内容 ☪

活動案内・1	鹿沼城探検～押原推移録から鹿沼城の歴史を繙く～	3
野州文献好古・1	「下野神社沿革誌」「押原推移録」	7
活動案内・2	石裂山ハイキング	
	～加蘇山神社より千本かつらを経て主峰月山へ～	11
活動案内・3	日光・女峰山黒岩尾根ハイキング	
	～標高を上げるとに種類を変える山上のお花見名所～	12
野州文献好古・2	「日光——その周辺的美と自然——」	13
表紙の本	徳富健次郎著『自然と人生』	15
活動報告・1	加蘇・久我の里を歩こう～鹿沼三十三観音巡礼～	20
活動報告・2	霧降隠れ三滝と大山ハイキング	25
活動報告・3	古峰ヶ原ハイキング	28
活動報告・4	鹿沼三十三観音巡礼の会	
	～第二十一番 梅が沢十一面観世音厄除け～	30
活動報告・5	古賀志山ハイキングと大谷寺参詣	32
山口さんの自然講座&エッセイ		
	節足動物について・贈られてきた本・佐々木君のしつもんについて	36
鹿沼の Unique な植物	サクラバハノキ～ひこばえの生える樹木～	38
生きていることば	陶山 務著『生きることの論理』	40
山書談話室		44
「小さな旅クラブ・鹿沼」草創の趣旨		45
あとがき		46
おしらせ	小さな旅クラブ 当面の活動計画(案)	47



鹿沼城探検

～押原推移録から鹿沼城の歴史を繙く～

鹿沼城に関する史跡を巡り、その一つ一つについて、押原推移録にある記述と照らし合わせ、目に見えぬ歴史を、目に見える史跡によって確認しようという試みです。何も言わぬ史跡が、歴史書に書いてある記述が事実であったことをきっと教えてくれると思います。

日 時：4月15日（日）AM8:50 鹿沼北小西門集合（解散予定 PM2:00）
行 程：鹿沼北小西門……御所の森……紫雲山千手院（鹿沼三十三観音第一番）
……^{けんこつ}拳骨山（坂田稻荷奥社）……岩上山……雄山寺（壬生義雄の墓）
……御殿山（昼食）……今宮神社……坂田稻荷神社……星宮神社
……鹿沼北小西門

服 装：防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート、スパッツ

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、LED ランプ、ストック、

参考図書（押原推移録、かぬま郷土史散歩、鹿沼の城と館）、

参加費：諸経費300円（謝礼等）、保険料

問合せ&申込み：090-1884-3774（阿部）／090-7283-8420（西澤）



本丸跡（御殿山球場）

≪鹿沼城探検・資料≫

御所の森～かぬま郷土史散歩

御所とは高貴な人の住居地を言う。鎌倉時代、日光山と押原（鹿沼）のつながりは深く、御所の森は日光山座主の別邸であった。建長 3 年（1251）に当時日光山の座主で、日光山中興の祖弁覚がこの御所で亡くなった。天文元年（1532）、壬生綱房が現在の御殿山である坂田山さかたに城を築き、同 3 年に御所の森にあった日光二荒神を城内（現在の今宮神社）に移し、今宮権現と称して城の鎮守とした。



北小学校の裏にある「御所の森」

弁覚については会報第 51 号の「野州文献好古・2」に詳しい。

千手院～かぬま郷土史散歩

紫雲山千手院の創建は天文 4 年（1535）といわれ、本尊千手観音像は鹿沼の城主壬生上総かずさのすけよしかつ介義雄の篤信により板荷観音原から移されたもので、かつて日光中禅寺立木観音、同清滝観音と一本をもって彫られたものという伝承があった。また、「二荒山神社」によると、仁治元年（1240）に押原千手堂の記録があり、これが千手院であるならば、千手院の創建はさらに時代を遡ることになる。



木造 千手観音菩薩坐像
（市指定文化財）

仁王門の左前に「当山仁王建立」の石碑があり、仁王が享保 17 年（1732）に建立されたことがわかる。

鹿沼城跡～かぬま郷土史散歩

鹿沼城は、天文元年（1532）壬生綱房によって築かれたという。しかし、壬生氏はそれ以前から鹿沼に居を占め、さらに古くは鹿沼氏を名乗る豪族がいたという事実と、城の縄張りや規模を詳細に検討した結果から、鹿沼城は綱房がはじめて築城したのではなく、かつてあった城を拡張、改修したのではないかと考えられる。

「鹿沼」という名が、歴史上にはじめて現われるのは、鎌倉時代の正応 5 年

(1292)に奉納された日光二荒山神社の通称化灯籠(銅製、国指定重要文化財)にある

願主 鹿沼権三郎入道教阿 并清原氏女 敬白

という刻銘からである。

その鹿沼氏の居所がどこであったかは、記録がないので断定出来ないが、すくなくともその末期においては鹿沼城以外の地を想定することは出来ない。ただ、当時の鹿沼城は坂田稻荷の奥社のあるところ、通称拳骨山げんこつやまなど、千手町から西鹿沼町への切り通しの北側の坂田山が城の中心であったと考えられ、典型的な山城の形態をしていた。今は拳骨山のくるわと、その南に延びる土塁と堀を残し、坂田団地の造成により削平され破壊されてしまったことは、大変残念なことである。



千手山裏に残る堀の跡
(2016年春の観覧会にて)

雄山寺(おうざんじ) ～角川日本地名大辞典⑨栃木県

鹿沼市西鹿沼町にある寺。曹洞宗。西鹿沼山生竜院と号す。本尊は釈迦牟尼仏。「押原推移録」によれば、前身は臨済宗寺院で光照寺と号した。天文7年のちに本寺となる瑞光寺(市内玉田)5世の天芝正遵を開山に迎えて現宗派へ改宗。その後壬生上総介義雄の菩提寺となり、天正18年義雄が相模国小田原で陣没すると、雄山文英の法名を付して当寺へ埋葬。この時従来の寺号を義雄の法名に因んで、現寺号へ改称した。



壬生義雄の墓

(鹿沼市史) 壬生氏は、寛政年間頃当地方に土着して勢力を伸ばし、日光神領総政所となるが、天正18年豊臣秀吉の小田原攻めには、北条氏に味方し5代義雄の死で没落(同前)。現在境内に残る義雄の墓は、塔高1.3mほどの宝篋印塔で、「雄山文英居士、天正十八庚寅年七月八日」と刻まれる。

宝蔵寺 ～かぬま郷土史散歩

宝蔵寺は、宝徳2年(1450)、祐讃の開山で、境内墓地にある歴代住職の墓石のうちに、祐讃の刻銘を見ることが出来る。はじめは、玉田朝日内にあった

ものを、壬生氏が城の鬼門よけとして現在地に移したという。慶安 4 年 (1651) の「古城跡全縮図」には、曲輪くるわ(城域)内に文殊院があり、まさに城の鬼門(東北)に当たっている。

本堂は、度々火災の難にあい、現在のは元禄年間(1688~1703)の再建とも、また、内陣内の銘により安永 6 年(1777)の建立とも言われている。



宝蔵寺、背後は岩上山

本堂内正面に、本尊阿弥陀如来坐像を拝することが出来る。像高約 1.4 メートル、台座とも 1.9 メートルという割合大きな本尊である。木造で全面に金箔を置く。

星宮神社〈虚空蔵さん〉～かぬま郷土史散歩

…社殿は昭和 35 年に鞘堂さやどうがかけられ、高い石壇をともなった一間社流れ造りである。屋根は銅版葺、軒ふたのきは二軒、四方に縁側を設け、周囲に高欄をめぐらし、正面中央に六段の階段を設け、その両側に沿って登のぼり高欄がある。本柱こしらと向拝柱むかひばいは、えび虹梁こりょうでつないでいる。妻飾は二重虹梁大瓶束彫刻充填式とも言うほど手がこんでおり、腰組こしあては三手先斗さんて栱きょうで、ともにていねいに、しかも重厚に造られ、社殿の小ささを感じさせないしっかりした造りである。

この社殿のもう一つの特色は、一見すればわかるように、全面彫刻で飾られていることである。正面軒下斗栱間の竜の彫刻をはじめとし両脇板、欄間、小壁、脇障子、羽目から縁下にいたるまで、彫刻ですき間がないほどである。これらの彫刻には奉納者の名前が刻まれている。彫師は、これも刻銘があり、石塚直吉吉明と、その門人同栄吉明儀である。(後記)町内の古記録によると、弘化 4 年(1847)ごろの作ではないかと考えられる。

星宮神社の主祭神は磐裂神、根裂神で、御神体は約 15 センチの木造神の坐



社殿を飾る彫刻の一つ

像で、傷みがはなはだしい。社殿内には、ほかに享保 5 年(1720)大貫出雲守銘の幣束立と、延享 4 年(1747)奉納の槍先と刀がある。文化 2 年(1805)の宿方明細帳によると、星宮は今宮の社家大貫出雲守の石高の内になっていて、幣束立の銘などから、そもそもは大貫家の氏神であったかも知れない。

鹿沼町

本町は鹿沼西鹿沼下府所花岡の旧一宿三村を合せて一の自治村となせしものにて其幅員東西凡一里十八町南北凡一里鹿沼は本町の稍中心にして自余各大字の民居其左右に連続し其地勢たる概ね平坦にして西部一方は山脈を以て限り黒川其東部を貫流し風俗淳良にして殖産興業の盛なる本郡に冠たり而して鹿沼及び西鹿沼は専ら商業に従事商家櫛比し本郡の小市聚地にて郡役所々在の地なり又日光線の停車場に当り貨物輻輳し旅客往来少なからず各村の沿革を尋ねれば往時各領主を異にし鹿沼は宇都宮藩の領する所にして西鹿沼花岡は幕府旗下の知行所なり下府所は代官支配なりしか維新后日光県に属し次て栃木県所轄に歸し第一大区十小区となり后又二戸長役場の支配となり次て町村制実施に当り合併して一町とはなれり本村には郷社一社村社三社ありて氏子戸数二千餘戸人口一万一千八百餘人を有せり

鹿沼町大字鹿沼字坂田鎮座

郷社今宮神社 祭神大己貴命 おこなむちのみこと 田心姫命 たごりひめのみこと 味耜高彥根命 あじすきたかひこねのみこと 建物 本社間口三間一尺奥行三間四尺 拝殿間口四間奥行二間半 石間間口一間奥行一間 幣殿間口二間奥行二間 饗殿間口三間奥行同 廻廊間口八間奥行八間 表門間口一間半奥行同 裏門間口一間一尺奥行同 鼓楼間口一間半奥行同 神輿舎間口一間半奥行一間四尺 直會殿間口五間半奥行三間 水盥屋間口一間二尺奥行一間 石瑞籬延長四十間 華表二基 制礼一基 氏子(千十六戸総代員) 社司島田敬三(同郡北押原村大字椈山住) 社掌小野口七百五郎(同町住) 社掌鈴木武七(同町住)

本社創立年月詳ならずと雖も二荒山神社神影を遷し往古は字御所森と称する平坦の地に勧請せしか濫觴にて後天文三年領主壬生下総守綱房今の地に遷座し爾来同氏の崇敬社たり後徳川將軍崇敬して社領を賜はり社家三戸を置き常に奉仕せしむ次て明治維新に際し郷社に列せらる社域四千三百十五坪高燥の地に在りて古松老杉天空に聳ひ風致幽邃にして愛すへし

(「下野神社沿革誌」明治36年発行)



▼ 鹿沼町古城(壬生上総介城跡)

一、城の地形、鹿沼町地形より十間高し。

一、本丸、東西四十間、南北三十八間、

一、二ノ丸、本丸より九折五間低し、地形東西四十五間、南北七十一間あり。

一、三ノ丸は、本丸より七間下りて東西十一間、南北は五十間あり。

一、本、二、三の丸より北の方細谷此谷北西に松小屋山あり。本丸山の高さ同前、此上に櫓屋鋪あり。東西三十六間南北六十六間、松小屋の山続き、東の方鹿沼町北の方出口に岩上山あり。此の山に櫓屋鋪あり。本城岩上山松小屋山と一ツに総曲輪堀あり。

一、本丸より西の方に、同地形にて三十三間に二十一間の丸あり。堀の広さ七間、深さ五間ありて殻堀なり。

一、右の丸より四間九折、西の方に三十六間と十九間の丸あり。此屋鋪下は田なり。但し西鹿沼村の内なり。

一、本丸堀より南は地形次第に下りなり。

一、根小屋東の方の堀権現前より南御殿の大手口北の角迄、百六十六間、御殿大手口より南入角迄二十間あり。

一、御殿の地形東西九十五間、南北八十三間、堀口は七間なり。

一、御殿御堀口より鹿沼町通り迄五十六間あり。

一、城惣構の内御殿の外は、蔵屋鋪侍屋鋪なり。

一、右の堀二、三の丸の分、竹木山に成塚、南次第下り平地、松小屋岩上山雑木山西の谷は田に成る。西鹿沼村なり。

▼ 鹿沼城要害

皆川正中録に云う。抑も鹿沼押原の城は、西の方に西鹿沼村とて、左右に山を引き廻らして、外より地面の一段低き村里あり、縦三十町計り横十町余の所なり。常に此処へ大芦川の水を引きて用水とす。又城の要害にも用いたり。此川の末に掛けたる橋を露取橋と云う。今の光太寺の前にある石橋なり。此橋の左右は至って狭き所なり。此川を堰留れば其村里は一面の湖水となりて、水の深き事限り知らず。是を裏手の要害として、又追手口へは、かの黒川の水を堰入れ、内外の堀共に水漫々として、舟にても容易に渡ることを得ずと云々。(以上摘要)

此文によって、今古墟の地理を量り考うるに、その虚文に非ることを知る。志ある人猶よく正し給え。

(次ページへ続く)

▼ 雄山寺由来

奉_ル寄進雄山寺之本尊釈迦牟尼仏新造功成_テ更觀世音菩薩_ヲ莊嚴_ス

下野州都賀郡西鹿沼村西鹿山光照禪寺。往古濟家、法窟中古曹洞門派、禪窟也。開山天芝正遵大和尚。往古百六十有八年已前。天文七戌年之開基也。其後領主壬生城主上総介殿為菩提寺則上総介殿主護本尊阿々弥之陀仏聖觀音菩薩。御長七寸。令_シ坐像則安置為_ス当寺之本尊也。然天正十八庚寅年七月八日。上総介殿逝去。葬於此寺。奉号雄山文英大居士。故以寺号改雄山寺。自天正十八年至于元禄十丁丑而年及百十有六年。予從主命而為此所之支配。来往春秋而彷徨八年元禄八乙亥年初夏三十日家内妻死葬当寺畢。境節住持祖周和尚曰斯寺之本尊。雖欲安置_{セント}釈迦如来自力不足久經星霜且為亡者菩提且為末代功德。希大重壯焉之旨強而以所勸_メ願不止而忘_{シテ}和尚_ノ索_ニ而令_メ寄進釈迦如来之像一仏造立_{シテ}而奉_ル安置雄山寺本尊_ニ。又所令莊嚴觀世音菩薩尊像者也為_ス二仏_ノ像立_ト与莊嚴_ヲ志之旨趣者但偏欲為_{セン}亡妻華安法栄大姉菩提也。時元禄十丁丑年月日施主飯沼四郎右工門源重賢敬書。

▼ 日光新宮唐銅灯笼縮図同考

奉治鑄

新宮御宝前

御燈 一基

右者為二世悉地成就円満也利益普及群類矣

正応五年壬辰五月一日

願主 鹿沼権三郎入道教阿敬白

并清原氏女

右在日光新宮大権現神門前自正応五年去今文政九年丙戌凡五三六年
(註・昭和九年前六四一年)

按_ウに、権三郎入道教阿(先祖考拠なし)唯古老の話に云う、往古正応の頃、鹿沼近郷を領し日光神領を掌り支配してありし人なるべし。故に神徳を仰ぎて灯笼を献ぜしなるべしとなり。

(次ページへ続く)

正中録に云う、延徳年間に、鹿沼右工門太夫教清といえるあり。則ち、権三郎入道教阿の子孫にて頗る猛威を振いて、宇都宮家と累世堺を争う事ありと。云々。

再び按うに、正応年中より延徳の間、凡そ二百年に近し。此間の系統、諸書を渉獵するに更らに拠を知らず。唯正中録に事証いささかみえたれども、系統を録せず、思うに、軍国争戦の中に居して二百年、家系絶せず、名立る宇都宮に敵して、累世地を争う事久しといえるをみれば、頗る権勢ありし事推て知るべし。博文強記にして、諸家の世系を詮索されたりし文翼子も、好古の癖ある井上信好子も考証すべきものなしと云われき。

正中録に云う、宇都宮十八代忠綱(後従四位下任下野守)小山下野守高朝を討たんとするの心ありて、先ず鹿沼を滅し、加園城(主将渡辺右工門尉)南摩城(南摩舎人之介)を降し、勢に乗じて皆川、榎本を共に麾下となして、小山の羽翼を去りて後、小山結城も滅さんと企て、鹿沼を攻めんが為に多気山に城を築きて出張とし、享祿三年亥十月二十八日(按うに一書には延徳三年とあり共に誤れり)。大永二年なるべき由、次に委しく弁ず)千五百余騎を卒して出陣す。右衛門教清是を聞きて、七百余騎を卒して黒川を渡り、上野台に陣す。忠綱多気城より出陣して血戦す。教清戦敗れて討死し、鹿沼の領地忠綱の有となる。教清に子なく、鹿沼の血統爰に絶す。(以上摘要)

按うに、上巻に録せる里人の口碑、那須記の趣などは、是を訛り伝えたる浮説を其儘に記せしなるべし。

▼ 紫雲山千手観世略伝

宝蔵寺末紫雲山千手院千手観世音菩薩の靈験あらたかなるは、普く世に知らるる処なり。往昔大同年中、勝道上人、日光山中禪寺男体の山開きの節、深山幽谷の中より異木を撰み一木を伐りて三体の観世音を刻す。一体は今日光山中禪寺にある観世音是也。故に人呼んで立木の観音と称す。中の木を以っては、今日光清滝に安置し奉る観音を刻し、末木を以って刻せし観音則ち今千手院に安置し奉るもの是なり。則ち是を俗に、一木三体の尊像と号す。

かかる縁故あるを以って、公儀よりも寺領三石の御朱印を賜わるもの也とぞ。
(押原推移録)

「押原推移録」昭和9年発行の孔版本→
雲竜寺にその刊行の記念碑が建立されている



石裂山ハイキング

～加蘇山神社より千本かつらをを経て主峰月山へ～

加蘇山神社の文献上の初見は、「(日本)三代実録」に「元慶二年九月十六日戊申に下野國加蘇山ノ神從五位下を授く」とある。これより加蘇山神社の御鎮座は元慶二年以前であることが窺われる。社伝によると、神護景雲年中日光開山勝道上人が当社の岩窟に靈威を蒙らんと数旬の間、起臥したと伝えられている。当神社は、磐裂命・根裂命・武甕槌男命三柱を御祭神として五穀豊穡、商売繁盛の神として、近郷の村々から崇敬を受けた。降っては承永年間には、源頼家父子の奥州征討に際して當舎に参籠祈願したところ大勝を得ることができその返礼として自身の鎧・大刀等を奉納し、さらに源氏の武運長久を祈願するに及んでは、中世を通じて兵馬の神として崇敬を受けるに到った。

(「民間信仰第三号」国学院大学神道研究会)

石裂山の歴史についてまだよく調べていませんが、足尾の庚申山が日光修験道の修行地であったり、庚申講の総本山があったりしたように、奇岩怪石の山は講を組んで登られることが多く、昔の人もこのようなちょっと危険な山を楽しんで登っていたのではないかと思います。石裂山も、加蘇山神社、中ノ宮、奥ノ宮、東西剣ガ峰、石裂山、月山、加蘇山神社と巡る道は昔から、いわば「テーマパーク」だったのです。

今回は特に危険な（と言っても現在はしっかりしたハシゴが架けられているのですが）剣ガ峰は避け、千本かつらの手前から右に進み、最高地点の月山に登って、石裂山を往復します。カタクリ、イワウチワ、キクザキイチゲ等早春の花は終わっていますが、フタバアオイやコチャルメルソウ、ヤマルリソウはまだ咲いているし、



「加蘇山神社石裂山神像」
古書店で見つけた掛軸

トウゴクサバノオや岩場ではヒメイワカガミの咲く季節なのかもしれません。沢沿いに山道がついていることもあり、他では見ることでできない草花が見られるのがうれしい行程です。月山手前の稜線上で見られるミヤマシグレはちょっと珍しい植物です。アカヤシオが咲く季節でもあり、相当混み合うことが予想されますので早出とします。

日 時：4月22日（日）AM6:00 鹿沼市役所^①、6:20 そば処久我^②集合

行 程：鹿沼市役所^①AM6:00——そば処久我6:20——加蘇山神社
……千本かつら……稜線……月山……石裂山……月山（昼食）
……加蘇山神社——鹿沼市役所^①

服 装：防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート、スパッツ

必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、LED ランプ、ストック、

参加費：ガソリン代等 300 円、保険料 330 円

（申し込まれた方は前日保険加入手続きをします。他の保険に加入されていて不要の場合は、申し込みの際、付記して下さい）

問合せ&申込み：電話 090-1884-3774（阿部）／090-4710-0648（祝）

活動案内・3

日光・女峰山黒岩尾根ハイキング

～標高を上げるごとに種類を変える山上のお花見名所～

日光の大谷川に架かる日光橋を渡って右折し、稲荷川林道を進みましょう。白糸の滝に車を置いて黒岩を目指します。滝尾古道を少し下って「大小へんきんせい」（大小便禁制）の碑を右折し、石段を登ると行者堂があります。この先、尾根上に出るまでの急斜面は鎮守の森で、モミなどの巨木がたくさん見られます。特に登りついた尾根上にあるヒノキは稀に見る巨樹。しばらく植林地を進み、林道に出て再び山道に戻ります。急登の上に殺生禁断碑があり、ここから先、5月中旬から下旬にかけてズミ、ヤマツツジ、トウゴクミツバツツジ、上部ではシロヤシオのお花畑となります。道は二手に分かれるので、行きは西側の道を選んでみましょう。2本の道が再び合流した少し下に、稚児ヶ墓があ

ります。ここから先しばらくヒノキの林が続きますが、次第に明るくなり、やがて広大な笹原になります。南側の展望がすばらしい。笹原を登りきってカラマツ林に入ります。道はやせ尾根の左斜面のザレ場を進むようになり、左に田母沢源流を見降ろします。行く手は女峰山と黒岩山の鞍部で、田母沢源頭です。黒岩山まではひと登り。雲竜溪谷上部の凄まじい景観が得られます。女峰山は古い火山で、奥ノ外山、赤薙山、女峰山、前女峰山、黒岩山で囲まれた雲竜溪谷最奥部は旧火口です。



山上の花園

帰りは同じ道を下り、稚児ヶ原から今度は東側の道を下ってみましょう。白糸の滝に着いて、時間があったら、滝尾神社に参詣し、石畳の滝尾古道を歩いてみましょう。

日 時：5月20日（日）AM5:50 鹿沼市役所①集合（PM3:00 解散予定）
 行 程：鹿沼市役所①——土沢 IC——日光 IC——白糸の滝……行者堂……殺生禁断碑……^{ちご}児ヶ墓……白樺金剛（水場）……黒岩……黒岩山……^{えん}児ヶ墓……白糸の滝——鹿沼市役所①

服 装：防寒着、帽子、手袋、軽登山靴または運動靴

持ち物：リュックサック、水筒（ポット）、弁当、おやつ、雨具、お手ふき、ハンカチ、ちり紙、筆記用具、レジ袋、レジャーシート、スパッツ
 必要に応じて：双眼鏡、ルーペ、カメラ、LED ランプ、ストック、
 1/25,000 地形図は「日光北部」

参加費：ガソリン代等 500 円、保険料 330 円

問合せ&申込み：電話 090-1884-3774(阿部) / 090-4710-0648(祝)

野州文献好古・2

修験道 土御門天皇の承元4年(1210)に但馬法印弁覚が日光山第24世の座主となった。弁覚は常陸(茨城県)の大方政家の六男で、聖宣の弟である。幼いときに比叡山に学び熊野山にはいつて修験道をおさめた。修験道とは山伏の信奉する教えである。役ノ行者を開祖とし、不動明王を本尊とする。弁覚によって日光

(次ページへ続く)

山にも修験道が栄えた。いまでも修正会しゅうしやうえの結願ごおうかじに修する牛王加持は、この弁覚から日光山につたわる秘法である。弁覚は、治山40余年で日光山の復興にすこぶる功績があり、日光山中興の祖とあおがれている。將軍実朝は深くこの弁覚の高徳に帰依して三重塔を寄進し、地方の豪族もまたきそって日光山の再興についたので、隆宣と禪雲の座主位争奪の兵火で焼け失せた堂塔伽藍は、金堂をはじめだいに復興した。彼の事跡のおもなものは、光明院(いまの輪王寺東本坊と東照宮御仮殿との地)をたてたことで、延応元年(1239)四条天皇から光明院の号を勅賜された。これからはこの光明院が日光山の総本院となった。

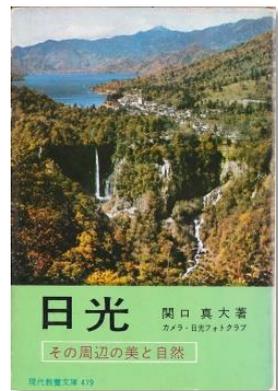
当時は、衆徒は36坊で、おのおの領地を有し、ほかに各坊付属の小坊をあわせれば300坊のおおきに達し、修験山伏は山中にあふれ、一山の領地は、桓武、平城、仁明、文徳の四朝の御寄付あわせて66郷のほか、後鳥羽天皇の御寄付、源頼朝、同実朝、ならびに宇都宮重綱、同忠綱らの寄進をあわせて71郷、18万石に達し、比叡山につぐ天下の大寺であった。しかも歴代の座主や数百の寺院の住持には地方豪族の子弟が就任して、それぞれ武力をそなえていた。足利、佐野、小山、壬生、真名子、宇都宮、鹿沼、結城、笠間、佐竹、塩谷、那須などの諸氏が、みな日光山に寺をかまえていたのである。したがって源平の戦から承久の変、建武の争乱にも、日光山の向背が戦争の勝敗につねにおおき影響した。

児ガ墓・幻夢物語 行者堂から殺生禁断石をすぎて1キロばかり女宝山道をのぼったところに小さな石地蔵ちざうがあって児ガ墓とよばれている。天文元年(1532)8月7日、実道坊の綱誉上人あきみねが秋峰修行のために数名の行者とともに女宝山にのぼった。上人が日ごろ愛ちごしていた児が、数日ののち、小さな足に大きなわらじつけ、菅笠を片手にただ一人その道を追った。音に聞くはっふう八風の難所にさしかかったとき、一陣の烈風がこの児をさらって千仞せんじんの谷底におとしてしまった。のちにこれを知った綱誉も悲しみのあまり男体山の絶壁から身を投げた。この懸崖をいまも実道なつき雑とよんでいる。この師弟の菩提をとむらうため秋峰の路すじに児ガ墓を立て、当時、この事実を脚色して「弁ノ草紙」という小説がつくられた。(以下略)

関口真大「日光——その周辺的美と自然——」

(現代教養文庫479)

(昭和39年6月30日・社会思想社)



徳富健次郎著『自然と人生』

(明治33年8月18日・民友社発行)

自然に対する五分時

一、此頃の富士の曙

(明治31年1月記)

心あらん人に見せたきは此頃の富士の曙。

午前六時過、試みに逗子の法に立って望め、眼前には水蒸気渦まく相模灘を見ん。灘の果には、水平線に沿うてほの闇き藍色を見ん。

若し其北端に同じ藍色の富士を見ずば、諸君恐らくは足柄、箱根、伊豆の連山の其藍色一抹の中に潜むを知らざる可し。

海も山も未だ睡れるなり。

唯一抹、薔薇色の光あり。富士の巔を距る弓杖許りにして、横に棚曳く。寒を忍びて、暫く立ちて見よ、諸君は其薔薇色の光の一秒一秒富士の巔に向って這い下るを認む可し。丈、五尺、三尺、尺、而してす。

富士は今睡より醒めんとするなり。

今醒めぬ。見よ嶺の東の一角、薔薇色になりを。

請う瞬かずして見よ。今富士の巔にかかり紅霞は、見るが内に富士の暁、闇を追い下し行くなり。一分、——二分、——肩——胸。見よ、天边に立つ珊瑚の富士を。桃色に匂う雪の膚、山は透き徹らんとするなり。

富士は薄紅に醒めぬ。請う眼を下に移せ。紅霞は已に最も北なる大山の頭にかかりぬ。早や足柄に及びぬ。箱根に移りぬ。見よ、闇を追い行く曙の足の迅さを。紅追い藍奔りて、伊豆の連山、既に桃色に染りぬ。

紅なる曙の足、伊豆山脈の南端天城山を超ゆる時は、請う眼を回して富士の下を望め。紫匂う江の島のあたりに、忽然として二三の金帆の閃くを見ん。

海既に醒めたるなり。



諸君若し倦まずして猶イまは、頓て江の島に對う腰越の岬赫として醒むるを見
 ん。次でこつぽの岬に及ぶを見ん。更に立ちて、諸君が影の長く前に落つる頃に到
 らば、相模灘の水蒸氣漸く収まりて海光一碧、鏡の如くなるを見ん。此時、眼を
 挙げて見よ。群山紅褪せて、空は卵黄より上りて極めて薄き普魯士亜藍色となり、
 白雪の富士高く晴空に倚るを見ん。
 ああ心あらん人に見せたきは此頃の富士の曙。

八、雑 木 林

東京の西郊、多摩の流に到るまでの間には、幾個の丘あり、谷あり、幾條の往
 還は此谷に下り、此丘に上り、うねうねとして行く。谷は田にして、概ね小川の流あ
 り、流には稀に水車あり。丘は拓かれて、畑となれるが多きも、
 其処此処には角に画られたる多くの雑木林ありて残れり。
 余は斯雑木林を愛す。

木は榎、樺、榛、栗、榲など、猶多かるべし。大木稀にし
 て、多くは切株より簇生せる若木なり、下ばえは大抵奇麗
 に払いあり。稀に赤松黒松の挺然林より秀でて翠蓋を碧
 空に翳すあり。



霜落ちて、大根ひく頃は、一林の黄葉錦してまた楓林を羨ます。

其葉落ち尽して、寒林の千万枝簇々として寒空を刺すも可、日落

ちて煙地に満ち、林梢の空薄紫になりたるに、大月盆の如く出でたる、尤も可。

春来りて、淡褐、淡緑、淡紅、淡紫、嫩黄など和らかなる色の限りを尽せる新芽
 をつくる時は、何ぞ、独り桜花に狂せんや。

青葉の頃此林中に入りて見よ。葉々日を帯びて。緑玉、碧玉、頭上に蓋を綴れ
 ば、吾面も青く、若し仮睡せば夢亦緑ならん。

初茸の時候には、林を縁どる萩薄穂に出で、女郎花芍薬林中に乱れて、自然
 は此処に七草の園を作れり。

月あるも可、月なきもまた可、風露の夜此等の林のほりを過ぎよ。松虫、鈴虫、
 鱒虫、きりぎりす、虫と云う虫の音雨の如く流るるを聞かん。おのずから虫籠となれ

るも妙なり。

十五、自然の色

(二)ハ汐の花

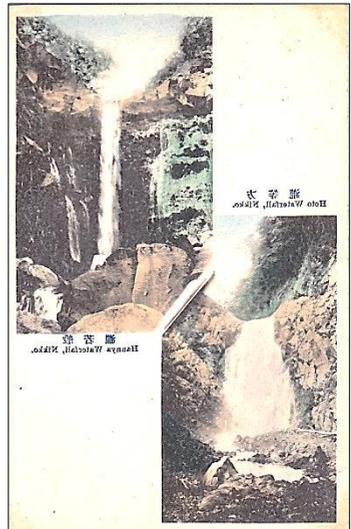


うまがえし あめ お ま
馬返を出づる頃、雨はらはらと落ちしが、間もなく止み、
しゅんわた こ こ ま かしこ の そのあいだ
春雲綿の如く此処に巻き彼処に舒び、其間より云う可から
ざる暖かき匂を含める薄き桔梗色の空を漏らしぬ。

みさわ きょう い だい や が わ び つく が た
路は深沢の峽に入りて、大谷川の水の美云い尽し難し。大谷川——川と云わん
よりは、寧ろ連続せる飛瀑とも云わん。氷を砕き雪を融かせる清冷の水、此処に
むし れんぞく ひばく こおり くだ ゆき と せいいい みず こ こ
到りて、また故の氷雪に復りつつ、峽より峽に折れ、岩より岩に飛び、飛躍して下
る。其の一たび躍りて雪を飛ばすや、飛沫は箇々日光を促えて金紫の色に輝き、
そ お ち て ま た む ら む ら と 湧 き 上 る 時 きれい えん せい び じつ
其の落ちてまたむらむらと湧き上る時、冷艶清美実に云う可からざる緑青色を帯
ぶ。此等の色は唯眼見る可くて、心已に思う可からず、沉んや之を状するをや。
ただがんじょう た 立 っ て、 空 し く 水 の 美 を 歎 ず る の み。

きゃく か みず び み ゑん ずじょう やしお さか みおと
脚下の水の美なるに見とれて、頭上の山のハ汐の盛りを見落すなかれ。
さくら ばら うすき くれなゐ はな わか ぼ みどり と な はいいろ こぼく うつ あい
桜花より濃く薔薇花より薄き紅の花の、若葉の緑に隣り、灰色の枯木に映り、或
は春空に襯して、峯背に簇立し、或は一樹斜に巖頭にさしかかり、蒼勝なるは
くれなゐふか す くれなゐあさ かしこ
紅深く、やや過ぎたるは紅浅く、山の彼処に
こ こ れ に 照 れ る を 見 よ。 ハ 汐 の 美 ま た 実 に 云 い
つく が た た ま た ま 男 体 の 巔 より 降 り 来 る 雲 の、
ほう づばさ お わた ごと かげ
鵬の如き翼を掩うて山を渉り谷を渉る毎に、蔭と
ひかり あい お か な た は な かげ けぶ
光と相追うて走り、彼方の花は蔭に入りてうち煙
りたる様にうすれ、此方の花は一樹鮮やかに
にっこう よう こ な た じゅあぎ
日光にさし出でてちらちら花唇を動かす。
くち ゆ やま みず はな ひかり かげ
雲の行くままに、山と水と花と、光に入り、蔭に
入り、笑み、鬱し、変化の妙を極む。

古い時代の日光の絵はがき
大谷川上流、方等滝 (左) と般若滝 (右)



人物紹介・徳富健次郎

とくとみ けんじろう、1868年12月8日（明治元年10月25日）—1927（昭和2）年9月18日。明治・大正期の自然主義・人道主義の小説家。徳富蘆花として知られる。「蘆花」の号は、清少納言が「蘆の花は見所とともなく」と書いた、その見所なきを却って愛するがゆえという。

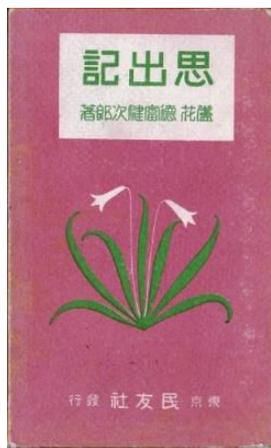
肥後国葦北郡水俣村に生まれ、同志社英学校に学ぶ。キリスト教の影響を受け、トルストイに傾倒。兄で思想家・ジャーナリストの徳富蘇峰（猪一郎）の民友社で下積みの後、自然詩人として出発し、1900（明治33）年、小説『不如帰』がベストセラーに、また随筆『自然と人生』の文章が賞賛され、一気に人気作家になるが、国家主義的傾向を強める兄とは次第に不仲、やがて絶縁状態となる。



1906（明治39）年12月10日の最初の講演以後、旧制・第一高等学校の弁論部大会での講演に影響を受けた学生は多い。

日露戦争後、トルストイ訪問の旅から帰国すると、1907（明治40）年、東京郊外の北多摩郡千歳村字粕谷（現・東京都世田谷区粕谷）に転居、半農生活を始め、死去するまでの20年間をこの地で過ごす。

1927（昭和2）年、病に倒れ、伊香保温泉で蘇峰と再会して和解、「後のことは頼む」と遺言して狭心症のため死去したという。享年58歳。（月報第40号再録）



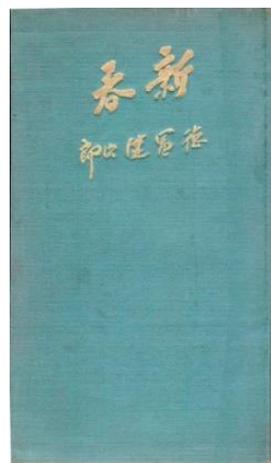
「思出記」

明治34年5月12日
民友社



「順礼紀行」

明治39年12月15日
警醒社書店



「新春」

大正7年4月11日
福永書店

徳富健次郎（蘆花）について、子ども時代に教材として親しんだ経験を持つ三木清が、その著書の中で次のように評価している。（月報第 40 号より再録）

…私どもは教科書のほかに副読本として徳富蘆花の『自然と人生』を与えられ、それを学校でも読み、家へ帰ってからでも読んだ。先生は字句の解釈などは一切教えないで、ただ幾度も繰返して読むように命ぜられた。私は蘆花が好きになり、この本のいくつかの文章は暗誦することができた。（中略）このような読書の仕方は、嘗て先ず四書五経の素読から学問に入るという一般的な慣習が廃れて以後、今日では稀なことになってしまった。今日の子供の多くは容易に種々の本を見ることができ幸福をもっているのであるが、そのために自然、手当り次第のものを読んで捨ててゆくという習慣になり易い弊がある。これは不幸なことであると思う。（中略）彼によって先ず私は自然と人生に対する眼を開かれた。もし私がヒューマニストであるなら、それは早く蘆花の影響で知らず識らずの間に私のうちに育ったものである。

三木清『読書と人生』より

（P.30 からの三十三観音巡礼の参考資料です）

十一面観音とは…苦しんでいる人をすぐに見つけるため、頭の上に 11 の顔があり、全方向を見守っている観音菩薩。それぞれの顔は人々をなだめたり怒ったり、励ましてくれたりするといわれる。十種勝利（現世利益：様々な災難、病氣治療、財福授与、勝利を得るなど）と四種果報（死後成仏：延命、地獄に落ちない、極楽浄土に行けるなど）という様々なご利益があり、千手観音菩薩と並んで人気の高い観音。六観音の 1 つに数えられ、修羅道に迷う人々を救う。

奈良時代から多く信仰されるようになり、延命、病氣治療などを願って多く祀られるようになった。

頭上面のうち前 3 面を菩薩面、左 3 面を瞋怒面、右 3 面を狗牙上出面、後ろ 1 面を大笑面といい、頂上に仏面を配して 11 面。本面とあわせて 11 面となる場合も、11 面の配列が異なる場合もある。大笑面は、悪行を大笑いして改心させ、善の道に向かわせるといわれる。左手に花瓶を持つことが一般的。右手を前にして開き施無畏手の 2 本の腕である場合が多いが、密教の経典には 4 本や 8 本の腕の像も説かれる。

菩薩には男女の性別はないが、十一面観音はふくよかな女性をイメージさせる美しい像が多い。

（“仏像ワールド”HP より）

加蘇・久我の里を歩こう
～鹿沼三十三観音巡礼～
11月5日（日） 天気・はれ

「そば処久我」の駐車場に鹿沼学舎、自然観察クラブ、合わせて15名が集合し、久我の里ハイキングに出発。まずはすぐ裏手にある常真寺に向かいました。常真寺の開山は祥山英吉とも、また久我式部大輔常真が天文年間に当地に移り住んだ折に氏寺として創建したとも伝えられています。門前右手には石造のお地蔵様や観音様、左手の台地の上是墓地で、周囲の斜面、コウヤマキの大木の下に石塔群があります。大きな宝篋印塔、月待信仰では珍しい奉待二十六夜供養塔、如意輪観音をはじめ、読解不明なもの、素性の知れない石碑・石塔もあり、興味が深まります。寺の裏手にも墓地があり、創建者と伝えられる常真の墓があり、その背後の山は久我城跡です。



大きなコウヤマキの
木の下で♪

天文年間に京都久我氏の一族久我式部大輔常真がここに居城し、元龜3（1572）年に佐野氏に加勢して後北条氏と戦い、戦死したと伝えられます。家臣たちは、その遺骸を引き取って葬り、常真寺を建てました。その没後も家臣たちは城を守りましたが、天正16（1588）年に粟野の戦いで滅亡し、領地は壬生義雄に召し上げられたといえます。寺は久我城の南端にあたり、堀が東西にまっすぐ延びて久我神社参道入口の方まで続いています。神社の入口にも石塔群があり、ここにも如意輪観音があります。



熊野神社前にて

久我神社は永禄年間、久我式部大輔常真が当地に館を構えてより、社号を「久我」と改めたといわれています。天正年間久我氏滅亡後、その社頭の繁栄は一時消え失せましたが、文禄3年社殿を再建、さらに享保年間には社位を賜うなど久我地区の鎮守としての崇敬を受けました。一直線に続く長い参道は杉並木で、その数と樹齢を考えると鹿沼随一と思われれます（今宮神社の表参道も、かつては麻苧町の突き当たりまで杉並木だったそうです）。鳥居には「昭和三十六年十一月吉日建之」とあります。また近くに久我神社沿革碑と石鳥

居記念碑があります。境内には拝殿石灯ろうと常夜灯があり、それぞれ「安政五戊午正月吉日」の刻があります。本殿は左側が久我神社で一間社流造、右側は富沢から移転された熊野神社で春日造。再建年代は久我神社が文化 13（1816）年、熊野神社も同年代頃と考えられます。久我神社の祭神は^{おおくにぬしのみこと}大国主命で後羽目に「天岩戸開き」、熊野神社の祭神は^{すさのおのみこと}素戔嗚尊で後羽目に「八またのおろち」など、いずれも日本神話や昔話を題材にした彫刻が配されています。彫物師は麻苧町の旧屋台彫刻（現河内町白沢）や石橋町鈴木家の孔子像などを残した磯辺空斎です。いずれも市指定文化財で、優れた彫刻です。常真寺に戻り、その先の右手にある八幡宮に詣でました。本殿の裏手に子待供養塔のほか、割れた如意輪観音と倒れたままの石塔がありました。直径 50cm 位の大木が 1 本あり、落葉の形からボダイジュとされます。さらに進んで県道に出ると右側に^{みまら}巳待供養塔と奉納百番の石塔があります。右の路地に入って再び山際の道を進むと、途中、山すそに墓地がいくつかあり、如意輪観音やお地藏様が見られます。梅が沢観音堂は梅が沢の流れのほとり、小高い台地の上にあり、参道は石段になっています。お堂を覗いてみると、中央には扉の閉まった厨子が安置されています。またお堂の回りには十九夜塔、如意輪観音、お地藏様、庚申塔があります。（梅が沢観音については 1 月 14 日の報告を参照）ここから県道に戻る途中右手に阿弥陀如来堂があり、後ろに立つヤブツバキは稀に見る大木です。県道に出て、今回は割愛しましたが右にしばらく進むと、左手の墓地が和田内の塔で、堂内にはお地藏様と腕が 4 本（？）の如意輪観音が安置されています。お堂の周囲には 2 頭の猿が向き合っている日光型庚申塔、お地藏様、子待塔等が見られます。荒井川にかかる富沢橋を渡り、富沢集落に向かいました。久我神社に本殿を移したという熊野神社はこの集落の一番奥の高台の上にあります。本殿を移した、という話とは裏腹に、ここに残っている本殿も久我神社のそれに引けをとらぬ優れた彫刻を配した見事なものです。参道には 3 つの石の小祠と男体大権現の石塔があります。

そば処久我に戻って解散。自然観察クラブはそばを食べている暇もなく、次の観察地、石裂山の千本かつらに向かいます。例によって加蘇山神社に参詣し、（マ）サカキ、ユキノシタを確認してタマアジサイやヤクシソウの花に驚き、時々あらわれる小さな滝に感激し、沢の真中に立つかつらの大木にあらためて不思議を思い、稲葉さんの拾ったスギの小枝に生えているセッコクに、自然のたくましさを覚え、まだ咲いていた紫色のクワガタソウに、鹿沼の自然の豊かさと美



石裂山の登山口
加蘇山神社の前で

しさを再発見し、そして歴史の町鹿沼を再発見した 1 日でした。

※ 参加者

赤羽根幸子、稲葉幸枝、祝 純子、小林 守、斎藤満子・徹夫・福田明子、
奈良 毅、西澤美智子、野澤辰郎、福田純一、渡辺敦子、石崎裕子、
阿部良司・みゆき（計 15 名）

※ 久我・秋の植物と風景



クコ



ゲンノショウコ

久我神社参道入口の道を歩く



※ 石裂山・秋の植物と風景



まだタマアジサイが



ヤクシソウ

クワガタソウ



スギの落ち枝に生えた
セッコク発見！



千本かつら近くの滝↑
↓巨樹・千本かつらの前で



✿ 参加者からいただいたおたより

好天に恵まれ、秋の「久我の里歩き」は心弾むハイキングでした。

常真寺から久我城の堀を見学後、舗装路を地道へと折れると杉、桧が林立。その根の張り出した、一直線の長い参道。まるで江戸期にタイムスリップしたかのような雰囲気のある並木の下を、久我神社本殿へと向かう。自称左甚五郎から十一代目の手による彫刻は見事だ。後羽目の「天岩戸開き」の人物を言いあてながら、ストーリーを愉快地話しつつ社殿を後にする。

手入れのゆき届いた茶畑、蓮池、収穫間近のそば畑、その小路に咲く植物名などを質問しながら次の八幡宮へと向かう。

坂道を少し登ると、お宮。その後方には石碑が並び、その中に「子待供養塔」あり。「子供の供養のためかな…？」と無知な私。「子待ちですよ」と言われ、ああ、そうだった…とようやく気づくトシマな私に大笑い。

田には稲架。そのかたわらに「巳待供養 天明四年」など江戸期の供養塔が目につく。

坂の上のお堂には「石裂観音二十四番」「鹿沼観音二十一番」の木札が掲げられている。お堂の傍らに倒れている板碑は中世の物で、鹿沼で最も古い物の一つと思われる、との事に、貴重な遺物が置き去りにされ盗難の危惧を抱いた。

お堂の坂下には、梅ヶ沢の澄んだ水が心地よく流れる。昔、この地で腸チフスが流行した時、梅ヶ沢の水を使うこの集落だけは無事だったという。このことにより集落には年2回の祭礼があり、その際お堂の回りを巡る等々の話を阿部さんから拝聴する。

道々、十九夜塔が目につく。山茶花の花を愛でながら宮沢地区のイザナギ、イザナミを祀る熊野神社へ向かう。宮沢地区ではかつてシシ舞があり、その頭が今も保存されているという。

小さな橋を渡ると、石裂観音堂二十二番札所のお堂。その先にある熊野神社の向拝の龍は神山政五郎、方立のリスとぶどうは石塚吉明の腕によるもので、後方の高砂や、ポタンなど素晴らしい彫りだ。菊政と吉明の合作はここ唯一との説明に再度見入る。鹿沼の屋台彫刻と遜色は感じられない。屋根に囲われているものの、自然の中で風化されずに保存されていることに皆感心する。地区の人達が大切に護り続けてこられたのだそう。

(次ページへ続く)

予定の時間も迫ってきたので、見学地が一部割愛となったが「久我の里歩き」を十二分に満喫し、「再び訪れてみようね」と仲間と話しながら帰途についた。

見聞が広まり楽しみが増えました。有意義な1日をありがとうございました。

(赤羽根幸子)



方々で見た石塔群と十九夜塔の一つ

久我の里……何があるのだろうと思う人がほとんどでしょう。

わざわざ足を運ばない所に、ひっそり佇む神社の数々や久我城跡。

よく見ると彫刻の素晴らしさは、鹿沼の屋台を思わせるほど貴重なものがありました。

今若者にもパワースポット巡りがはやっている中、老若男女とわず好きな方にはとても楽しい時間を過ごせそうです。

また、周辺にも古民家が点在しており、のんびりした田舎道を歩きながら昔を思い出すのも素敵ですね。

ただ残念なことに、このような所があるという事を知られていないのです。

このすばらしい財産を、もっと多くの人々に知って頂けたらという思いに駆られました。

(祝 純子)



久我の里、実りの風景

霧降隠れ三滝と大山ハイキング

11月19日（日） 天気・くもり

霧降滝の一番奥の駐車場に車を置き、霧降の滝は戻って来てから見てもよいからと、とりあえず上に向かって出発。ここはすでにつつじヶ丘であるらしく、広々とした草地のへりにヤマツツジが多い。森に入ればしばらく霧降高原道路に並行した山道を進む。右の霧降川に降りる道があらわれたが、テープが張られ通行止めになっている。ここ数年来的大雨や大雪で道が荒れているのだろう。道の様子を確認するため、みんなには先に行ってもらい、阿部は独り霧降川まで下ってみることにする。しばらく尾根に沿って歩いた後、左に折れ、急下降になる。道はやはり土が流され、荒れている。降り着いた河床は広々とした、そこそこ樹齢を重ねたヒノキの大木の林である。美しいおやかな水の流れ、それを取りまく明るい落葉樹林。人知れず存在する空間。こんな所に暗くなるまでずーっと居て、闇の中に溶け込んでみたい。



猫ノ平より赤薙山を望む

川は2本に分かれていて、手前のゆるやかな流れは簡単に渡ることができたが、向こうの流れは急流で水量も多く、架けられていたはずの橋は流されて、濡れずに渡るのは困難である。状況を把握したので来た道を引き返し、分岐点に戻ってみんなの後を追う。霧降高原道路からマックラ滝まで、おそらく大山の霧降牧場への往来のために造られたらしい車道があって、入口に遮断機がある。橋を渡って右、丁字滝への下降入口を見送って滝上流の沢の左岸をしばらく進む。みんなに追いついて小尾根を乗越し、霧降



霧降川を渡る

川に降りる。橋を渡って左手に密かなる暗がりを見る。近づいて見るとそれは霧降川の支流の合流地点であり、崇高なる断崖に囲まれた巨大なマックラ滝とその滝壺だった。中央に立つ御神木は石裂山の千本かつらに似るものの、サワグルミの稀に見る巨樹である。その巨樹の下で写真を撮ったり、滝壺のすぐ近くまで行って、しぶきを浴びて遊んだりしてから出発。

この林道は滝の所で完全に閉鎖され、中は牧場である。右の登山道に行く。この道はやがて玉簾滝に至る道であるが、

すぐに左の登山道に入る。標高差 150mの明るい急登を一気に登って猫ノ平(974m)へ。ここは牧場内で広い笹原の台地。大山に至る広い緩斜面が見渡せる。その左に聳える赤薙山は予期せず殊更大きく見えた。いつも南側からばかり見ている女峰赤薙連峰を横から、赤薙山に近い所から見ることで、そしてこの遮るもののない広い台地から眺めることは、いかにその対象を雄大たらしめることか。

マックラ滝まで戻って滝見食事会。櫻井さんや西澤さんが昨日丹精込めて作って来てくれたケーキや、誰ぞが鍋ごと持ってきた豚汁をお腹いっぱいいただく。

歩いてきた林道に戻って小尾根を乗越し、丁字滝入口に来る。この沢の水はやがて丁字滝となって落ちるので、この河床を下流に向かって進む。水辺のこととて、カエデ科のチドリノキが多い。沢は突然丁字滝となって落ちるのでちんたら歩いてはられない。一番上の滝は垂直に落ちていて落差も大きい。斜めに落ちる下段の滝を含めた全体の構図がこの滝の美しさだ。先に進んで霧降川に架けられた丸木橋を渡る。玉簾滝は霧降川本流にかかる滝で大きく2段に分かれ、霧降ノ滝に共通するナメ滝であり、その落差は別としても、長さは霧降ノ滝以上のものではないかと思われる。ここから少し登れば大山入口につながるはずであるが、ここは元来た道に戻ることにする。つつじヶ丘に戻り、霧降ノ滝見物は割愛したが、途中日光で観音寺に立ち寄り、石碑、石仏を見学して帰路についた。



シダの仲間

コケの仲間

※ 参加者

石川晴樹・さやか、飯野かをる、祝 純子、櫻井節子、西澤美智子、石崎裕子、阿部良司（計8名）

※ 三滝めぐり点景



←マックラ滝

玉簾滝→

↓丁字滝



コケの仲間



※ 参加者からいただいたおたより

2年間のブランクによる筋力の衰えには、啞然としてしまいました。

平坦な道、下りは何でもなかったのに、急な登り坂の一段の屈伸が思うように行かず、見兼ねた方がポールを貸してくださりお陰様で一步一步登れるようになりました。皆さんの労わりの心が有り難く涙の出る思いでした。

息子が「もう懲り懲りだと思ったんじゃない？」とメールしてきたので「とんでもない、早速トレッキングポールを取り寄せて、次回に備えているわよ」と返信し(次ぐこぞへ続く)

好天に恵まれ隠れ三瀧も見られたし、少し風花の舞う真っ暗滝の前での昼食は、会話も弾み思いもかけぬ阿部さんの豚汁に舌鼓を打ち、和やかな忘れられぬひと時でした。

12月17日の古峰原高原、深山巴ノ宿と三枚石ハイキングも、一度行った事があるので楽しみです。
(櫻井節子)

つつじヶ丘にて→



霧降隠れ三滝…案外知られていないようで今回初めての方がほとんどでした。水量も多くとても素晴らしい三滝でした。

近道をしようと廃道に行ったのは、やはりダメですネ!! 戻る結果に!! 安全第一で行きましょう。

その後の猫の平の大展望。この時期ならではの風景です。

目の前の大山にも行きたかったのですが、時間の都合もあり次回の楽しみにしましょう。

山を下り、お昼は贅沢にも、マックラ滝の前での大宴会。

阿部さんのサプライズで豚汁鍋です。“一同驚き”

さらに桜井さんの御馳走で、もうお腹がいっぱいです。

風花もちらちら舞う中、とっても美味しかったです。

その後は丁字滝、玉簾れ滝と回り、ただ見とれるばかりでした。

足を運んでこそその絶景でした。

西澤さん桜井さんのあの場でのケーキは最高です。

ありがとうございました。
(祝 純子)



女子会さながら
持ち寄り山ランチ♪

古峰ヶ原ハイキング

12月17日(日) 天気・雪のちはれ



新雪の山道

この冬は、ラニーニャ現象の影響なのか冬型の気圧配置が続き、久しぶりの寒い冬となっている。この日も冬型で、関東は概ね晴れの予報。しかし北部山沿いはこういう気圧配置の時に大雪になるのだから、古峰ヶ原だって微妙だ。案の定、日光連山には雲がかかっている。古峰神社でトイレを済ませ、中間駐車場を見送り、急登になってきた所で雪が降り始めた。

古峰ヶ原峠に着くと本格的な雪。雪景色を楽しんで撤退しようともくろんでいたが、車を止めると途端にみんな飛び出して、説得するいとまもなくそれぞれ出発準備に取りかかっている。ミズナラの枝に寄生したヤドリギ。高い枝を見上げると、伸びる枝が1年ごとに多少左右に角度を変えるのでジグザグに見えるミズキ、幹がマクワウリの模様をしたウリハダカエデ、樹皮が小さくはげて、枝に小さな松ぼっくりのような実を付けたヤシャブシ、樹皮が細長く割れて上に行くに従ってねじれて行くネジキ、真直ぐな幹に垂直に横に枝を伸ばすウラジロモミ、白い、美しい肌の樹皮を持つブナの大木。そんな樹林の観察をしながら、雪道をのんびり登ったせいか、はたまた、長年育まれた体力のおかげか、80歳の櫻井節子さんも元気に三枚石に登頂。気が付けば頭上は真青な晴天。

三枚石新道を少し下って五枚石まで行ってみると、そこは足利の名草巨石群を思わせる園地で、五枚石の他にもたくさんの花崗岩の巨岩があたかも天狗が遊んだように置いてあって、中には割れ目から上の部分が50cmも地震か何かですれ動いたものもあり、割れ目が水平になっていることに気付く。三枚石に戻って、今度は横根山への道に足を延ばしてみる。小さな赤い実を付けたズミの林を進んで行くと、大きなヒトツバカエデがある。落葉を調べてみると切れ込み(逆に言えば裂片)がなく、円形に近く、芽の付き方からして葉は対生なので、オオカメノキと間違えやすいが、オオカメノキは横に横に枝を伸ばすものであるが、この木はどの枝も上に向かって伸びているし、葉もオオカメノキより



五枚石の前で

小さめである。

峠まで戻って、あすまや周辺の樹木を調べる。アジサイのような飾り花を残しているノリウツギ、1cm位のトゲのあるメギが見られる。荷物を持ってヒュッテ周辺でお昼にすることにした。そこに向かう旧林道沿いではガマズミがたくさん赤い実を付けていて、その近くにはびこるツルウメモドキもこれまたたくさんの黄色い実で、冬枯れの単調な景色に彩りを添えている。ここには枝にカミソリのような翼が付いているので知られるニシキギがたくさんあるが、ここのニシキギは樹齢を重ねた古木が多く、その翼が著しさを失い、一見ニシキギと気づかずに通り過ぎてしまいそうである。この辺りにはマユミも多い。風が強いのでヒュッテ内でお昼。いつものように各自持ち寄ったお料理を分け合い、思いがけない発見をすることしきり。毎回楽しみな櫻井節子さんの今日の作品はパンケーキ。それぞれ作り方などの解説付きで、ひとときの料理教室である。

この旧林道を進んで新しい車道に合流する所が深山巴の宿で、今回は車で新道を通じて参詣に向かう。古木の林立する広大な森を進むと、鳥居や小祠や石碑の立つ鎮守があり、周りをお堀で固めた島のようになっている。参拝して石碑に刻まれた文字を確認し車道に戻る。巴の宿の入口に流れてきている小沢を登ってヤチダモのある湿地に行ってみる。しかし、そこは川が蛇行して、ただの河原になっていた。2年前の豪雨で、この上にできた新しい県道に集まって流れてきた水が、この小沢に集中して、ヤチダモの木を湿地もろとも押し流してしまったらしい。もともとこの湿地を通る予定であった県道を、湿地があってヤチダモがあるから、とルートを変更してもらったのだが、自然破壊は新たな自然破壊を招くのである。

古峰神社に参拝し、寄進された数々の大きな石碑、社殿の茅葺き屋根、大正時代の絵はがきにも見られた拝殿の立派な彫刻に感激し、新年でもないのに多くの他県ナンバーの車が駐車場いっぱいになっていることで、改めて古峰神社が鹿沼最大の観光地であることに気がついた。いろいろな種類の御朱印が大変な人気なのだそうだ。

✿ 参加者

飯野かをる、石川さやか、祝 純子、櫻井節子、阿部良司（計5名）

✿ 見た植物

（広葉樹）アオハダ、オオウラジロノキ、ウリハダカエデ、ガマズミ、コシアブラ、サラサドウダン、シラカバ、ズミ、ダケカンバ、ツルウメモドキ、ニシキギ、ネジキ、ノリウツギ、ヒトツバカエデ、ブナ、マユミ、ミスキ、ミズナラ、メギ、ヤシャブシ、

ヤドリギ、ヤマツツジ、ヤマハンノキ、リョウブ、
(針葉樹) アカマツ、ウラジロモミ、ヒノキ

❁ 初冬の古峰ヶ原点景



古峰ヶ原の山頂
三枚石の前で



深山巴の宿

🌀 活動報告・4 🌀

鹿沼三十三観音巡礼の会
～第二十一番 梅が沢十一面観世音厄除け～
1月14日(日) 天気・はれ

この日は故・塩入安三郎先生の選定された鹿沼三十三観世音のうち、第二十一番・梅が沢観音堂の厄除け(お祭り)にあたり、ご開帳となって、堂内に安置されている厨子の扉が開けられるはずです。どんな仏様が現われるのでしょうか。この観音堂を管理されている小林重夫さんに何度かお話を伺いました。このお堂では1月半ばと8月のお盆17日の頃に厄除けがあり、1月の厄除けではお線香と御神酒とお赤飯をあげ、8月の厄除けではお線香と御神酒を上げ、「千度申す、万度申す」と唱えながらお堂のぐるりを回るのだそうです。昔、梅が沢観音堂の厄除けをやめたことがありました。たまたま久我神社のスギの大木を伐採することになり、久我地区から5～6人集まって切り倒しました。枝を整理して薪として持ち帰り、各自必要ない細枝などを燃したそうです。するとそれぞれの焚火が火種となって火災が発生し、久我の大火となり、朝鮮人参を栽

培していた小屋（ビニールハウスのような雨よけか）も焼けました。また同じ年、久我地区で赤痢が流行りました。久我地区は地下水が出にくく、多くの家庭で沢水を生活用水として使用していたのです。しかし、梅が沢の水を使っていたこの地区の住民だけは難を逃れたのです。そこで梅が沢の住民たちは、これは観音様のご加護によるものであると信じ、今も梅が沢観音堂を守り、厄除け行事を続けているのだそうです。

この日、我々が到着すると、沢のほとりの小高い台地の上にある観音堂には、すでに20名ほどの住民が集まっておられ、大貫氏のご挨拶の後、御神酒、お赤飯、お線香が配られ、御神酒とお赤飯は各自いただき、お線香は観音講と山の神に供えました。

すでに堂内に安置されている厨子の扉は開けられ、十一面観音立像に拝謁することができました。金箔の施しはなく、傷みが見られ、年代的古さが見てとれます。参加された赤羽根幸子氏は傍らに置かれた割れた板碑を指し、板碑が盛んに造られたのは鎌倉・室町時代なので、この十一面観音とこの板碑につながりがあるとすれば、この仏像が鎌倉・室町時代の作である可能性がある、との説明でした。



梅が沢観音堂の前で地元の方々と

※ 参加者

赤羽根幸子、石川さやか、祝 純子、阿部良司（計4名）

※ 鹿沼三十三観音・久我の風景



梅ヶ沢観音堂
十一面観音菩薩が
安置されている



和田内塔の如意輪観音



坂本の観音様



※ 十一面観音菩薩についての解説を19ページに載せましたのでご参考に。

古賀志山ハイキングと大谷寺参詣

1月21日(日) 天気・はれ

初参加の小森勇次さん、知子さん、神田敏範さん、敏子さんと森林公園で合流し、今日の行程を確認して出発。2年前の大雨の影響で荒れたのか、釣堀は痕跡もなし、向こうに新しい家が建っているのみで、周辺は伐採されたようである。細野ダム方面への道も進入できなくなっており、その奥では、まさに伐採作業中である。ここは沢沿いの北登山道とP.559 への中尾根コースの登山口であるから、歩行者は完全に通行止め、というわけではないと思う。ここはちょうど東陵見晴台に続く東尾根コースの取っ付きであり、1週間前に祝さんに案内してもらった時は車道を進んでこの尾根の中程に乗越したが、今日は尾根のとば口から入ることにする。尾根の先端に小ピークがあるので標高差80m登ってから少し下ることになる。下半分に植林地は多いが、岩山で人の利用できない古賀志山の、特に上部は自然林で、コナラ、アカシデ、ホオノキ、アオハダ、ミズキ、アオダモ、リョウブ、ネジキ、アブラツツジ、ヤマツツジ、シラカシ、ヒサカキ、アカマツなどが多く、幹にひし形模様のあるウラジロノキや羽根突きの羽根のような実を付けたツクバネも見られた。途中クサリ場が2ヶ所続く。手はしっかりクサリを握るが、腰から上は垂直に保って確実な出っ張りに足を掛けて登るのが良いようだ。1週間前に祝さんと来た時、僕は見晴台から南西方向に次回訪れることになっている雨巻山と高峰を確認したのであるが、その向こうに、明らかにその2山よりやや高いと思われる山を見た。栃木県南東部の最高峰は雨巻山で、同じ山域に高峰と仏頂山があるが、その向こうにある山は茨城県側にそびえる吾国山であり、この山域の最高峰である。

高原山の右に、栃木百名山の一つで、登山道がなく、行程2日かかるという大佐飛山も見えたが、今日は霞がかかっていて、いずれも見えない。古賀志山頂に向かう途中、ミズメを見る。古賀志山から、まずは御岳山を往復して来ることにして出発。なるべく稜線をたどることにしたので、ちょっとした岩登りを楽しむ。1週間前は御岳山から奥



古賀志山山頂にて

白根山、錫ヶ岳、皇海山を見ることができたが、今日は霞でかなわない。古賀志山に戻ってお昼にする。祝さんと来た時はここから南側に降りる道を教えてもらった。クサリ場はなかったが、岩場が多く急下降で結構楽しめる。神田さんご夫妻はかつて東尾根コースを試みた時、クサリ場で断念し、下山して、

この急登を古賀志山に直登したそうである。

古賀志山でお昼。3月頃になると、ここで休んでいれば成虫で越冬した蝶が見られるが、さすがにまだそういう季節ではない。千手山の山頂でさえ、お花見の季節にはタテハの仲間や、春型の小さなアゲハチョウを見ることができる。里山の山頂には山の斜面を登ってきた蝶が、それ以上上に行くことができなくて集まってしまふものらしい。

下山は富士見峠から谷沿いの北登山道を辿ることにした。谷沿いだから登りとは違う植物がありはしないか、と考えたが、期待通り、テイカカズラのトウガラシのような赤い細長い、2本組の実や、フユイチゴの赤い実、また常緑低木で、赤い蕾をたくさん付けたミヤマシキミの小さな群落に出会えた。通行止めになっている伐採地は作業は終わっていたが、道がわからず、神田さんに先導していただいて抜け出すことができた。帰りは大谷寺に参詣し、近くにいながら、あえて来ることのできなかった大谷観音に拝謁することができ、1日の小さな旅に満足しつつ、解散となった。



大谷平和観音

※ 参加者

神田敏範・敏子、小森勇次・知子、石崎隆史・裕子、阿部良司（計7名）

※ 冬の古賀志山歩きの風景



中尾根を望む



東尾根を登る



大谷寺



御嶽山山頂にて

ヤマツツジ



ツクバネ



ミヤマシキミ



テイカカズラ (実)



フユイチゴ

※ 参加者からいただいたおたより

先頃は、夫婦共々大変お世話になりました。

今までの登山と違った、ゆったりとした時間がとても新鮮でした。

普段はなるべく早く登頂を目指し、足元の草花、周辺の樹木等あまり注意深くは見てはいませんでした。

これからの時期、四季折々の草花を観察したいものです。 (小森勇次)

先日は大変お世話になりました。

古賀志山は何度か登った事がありますが、今回の登りのルートははじめてでした。

鎖場を目の前にした時は、ちょっと驚きましたが、登ってみるとスリルも味わえて楽しかったです。

阿部さんの草花への説明も有り、いつも主人と登る登山とは違った楽しさがありました。

頂上でご馳走になったおしるこもとても美味しかったです。

また是非機会がありましたら参加させてもらえれば嬉しいです。

今後ともよろしくお願ひ致します。

(小森知子)

※ 古賀志山展望写真館 (阿部が1週間前の好天の日に撮って来たものです)



古賀志山から見た白根山



錫ヶ岳



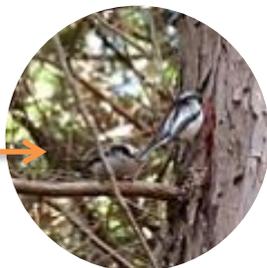
皇海山



奥ノ外山 (中央やや上)



工ナガ (2羽いるの、わかりますか?)



節足動物について

今号からしばらくは昆虫を予定していますが、それ以外のものでも珍しい写真が撮れたら載せたいと思います。

エビやカニ、フナクイムシ、グソクムシなども節足動物であるが、昆虫類のほかにクマムシ類、カニムシ類、クモ類、ダンゴムシ類、ダニ類、ムカデ類、ヤスデ類、ザトウムシ類、サソリ類があり、サソリ類はさらにムチサソリ類と2分されている。ダニも毎年、多くの新種が見つかっていて、その数はつかみきれないが、地球上で最も栄えているのは昆虫である。全動物の7割以上を占めていて、多く見積もる学者は3000万種はいるだろうという。



その歴史も古く、古生代デボン紀(4億8000万年～3億6250万年前)の地層から化石が見つかる。古い時代ほど見つかった化石は少なく、詳しいことは分からないが、最初に現われた昆虫は羽がない無翅昆虫である。古生代石炭紀(3億6250万年～2億9000万年前)では、ゴキブリや巨大なトンボなどの有翅昆虫の化石が見つかる。その起源はミズのような形で、多くの環節を持った原始的な生物から各節に付属肢(足)が生じ、唇脚類(ムカデ)のような形になったと考えられている。

足が少ない昆虫は、より原始的とは言えない。逆に必要のない足は退化したと考えられる。昆虫は形を変え、あらゆる環境に適応したので、飛ぶ必要のないものは羽がない。飛ぶことで、あまり歩かない蝶の一部には、後ろ足が退化途上であり全く用をなさないものいる。昆虫の歴史の流れを見ると、退化も進化の1つであり、数ある節足動物の中で最も進化を遂げたのは昆虫である、と言える。

贈られてきた本

阿部隊長から、小清水卓二博士の著書『万葉植物』という本を持っているか聞かれた。(月報第36号参照) すべての本を持っていたが、今はないので送っていただいた(右写真)。

同時に、今は無き保育社刊の『原色日本蝶類図鑑』横山光夫・若林守男著の12刷で、1972(昭和47)年の増補改訂版である。この図鑑の初版は、1954(昭和29)



年に横山氏が出版された。(下に写真と序文)

1976(昭和51)年の全改訂版ともなると、日本に返還された沖縄や小笠原の蝶も含まれているので、その数は大幅に増えた。このことから、最新版の方がよいのであるが、この図鑑だけは初版に注目している。なぜなら、横山光夫氏の解説は、文学者も舌を巻くほどであり、ここから蝶の世界にのめり込む人が多いと聞くからである。

私が中学生のとき、大阪から昆虫採集に来た同じ年くらいの子がいて、みんな本格的な補虫網を持っている。どこに売ってるか聞くと、大阪梅田の阪急百貨店だという。店員は横山史郎氏で、ずっと後に横山光夫氏の息子さんと知ったが、その彼に聞いても、初版は手元にないとのこと。初版は私が1歳の頃に出版され、4歳のときに横山光夫氏は他界されているが、12刷には同氏の序文が載っていて、また一歩初版に近づいたと感謝しています。私が奈良へ帰る日が近づいたとき、ほしい本がないか尋ねられた。入手困難と思いつつも、保育社刊で昭和天皇が著わされた「那須の植物誌」だったが、見事に手に入れて下さり、『原色日本菌類図鑑(保育社)』など全4冊をいただいた。

序

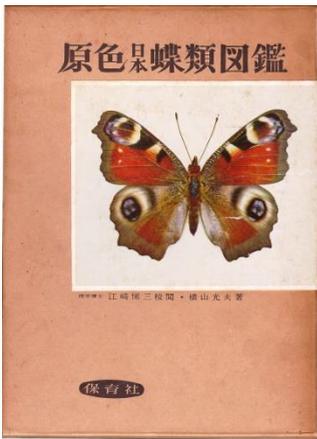
大自然の芸術的な作品として蝶はその代表的なものと見てあえて誇張とは思われない。昆虫への関心はひたすら少年の日の思い出のそのの様に、この道のファミリーへの天与の夢であり、心の憩いでもある。

過ぐる日の戦争は心と物の貧困と窮乏のさ中へ、彩りも潤いも自然への憧れさえも、忘れさせて行った。今では花彩られる公園さえ、芋や南瓜の葉に覆われて空腹の表情の象徴と化し、歌を忘れた少年達は冷めたい学園の窓に永い冬の生活を繰り返した……………。

いつか敗戦の焼跡には街路樹が芽ぶき、草原の街にも泪ぐむ瞳の様な灯が光った。生活の営みであり裏付けでもあった蔬菜園は、いつか家庭団欒の趣味の場となり、寸土を惜しんだ庭の一隅は草花に飾られて、とある日の午後

一頭のモンシロチョウさえ訪れた。その日のまざまざしい記憶はまだ昔の夢ではない。昆虫への趣味と学究的な関心は、必ずしも採集家であり、蒐集家であるべき約束はなく、広く豊かな知性と識見をもって自然を觀賞し、自然に親しむことこそ、よりよき人生の営みでなくてはならない。

この地上の天国に、花の楽園を訪れる色彩様々な季節の舞姫は、お伽の国の幻想であり、絢爛たる空飛ぶ花にも紛う風情がある。何れの国にもこの可憐な生き物を慕う蝶の愛好家は数多く、その研究は専門家とアマチュアとを問わず極めて盛んである。併し自然の神秘は限りなく奥深く、私どもの未知の世界は無限である。



佐々木君のしつもんについて

月報第50号が届き、お礼方々、同号に寄せられた佐々木伸二君の質問のことを阿部隊長と話していると、私が答えを書いてと言われました。見ていないので困ったなあと思いましたが、私なりに述べます。

金魚とメダカを飼っていて、金魚の泳ぎ方が変、ということですが。それには水替えと病気が考えられます。水替えは急な温度変化です。ですから替える水を同じ部屋に置いておきます。

病気については、たった一匹病気にかかっていたら、感染して全滅することがあります。打っている人でも、泳ぎ方が変になるまで気付かないものです。流水に流されるのは、病気か寿命の2つが考えられます。ですから買うときは、大きくて立派なものよりも、元気な幼魚を選んでください。その方が長生きします。空気ポンプを2つにすれば改善できたそうですが、その後元気であれば、それが原因だと思います。タニシが出てきて水槽をそうしてくれるというのは、ヒラマキガイだと思います。アンモナイトのような形であれば、間違いありません。同じ目的で熱帯魚屋さんも水槽に入れていますが、メダカを買ったときに、貝の卵などが入っていたのでしょう。小さいので、出てくるまで気付かなかったと思います。 (山口龍治)



鹿沼の unique な植物

サクラバハンノキ～ひこばえの生える樹木～

JR鹿沼駅の北東、仁神堂町に糠塚山がある。北側は広大な雑木林で、カブトムシがたくさんいるが、糠塚山と雑木林の間を東西に走る車道沿いは湿地になっているし、その向こうはクヌギの林だけれどひどい笹藪なので、この林に入るのは気が重い。その北側に流れている武子川が大雨の時に氾濫して、この林は水浸しになる。その洪水の時に種子が流されて来たのだろう、その湿地にサクラバハンノキがある

ハンノキと同じようなものだろう、と思われるかもしれないが、ハンノキの樹皮が「不規則に浅く裂けてはがれる」のに対し、サクラバハンノキのそれは「なめらかで、古くなくてもハンノキのような割れ目は入らない」。さらにハンノキにはひこばえが生えないが、サクラバハンノキには必ず、見事なひこばえが生える。全国的に分布しているが、自生の記録は点々としていて、見つけるのが難しい、湿地のみに稀に生える絶滅危惧種である。

このサクラバハンノキが初めて発見されたのは日光市(旧今市市)の岩崎であると、僕は聞いたことがある。宇都宮の森林公園から文挾に向かう途中、宇都宮市から日光市に入ったあたりの左側の山林の奥に、美しい湿地がある。早春にはザゼンソウの花が咲き、相当樹齢を重ねて見事なひこばえを纏ったサクラバハンノキが林立している。サクラバハンノキは、日光鹿沼あたりでは武子川沿いに分布しているようである。

サクラバハンノキにどうしてひこばえが生えるのか、僕にはわからない。

人は生き物の目立った特徴を指して、その存在目的を云々する。何の機能や形態についてもたまたま偶然に発生したものとか考えようがないが、もし偶然にできた機能はその生物の生存や繁殖において有効なものであると、その機能は積極的に使うことになるので、次第に発達してくるものである。といて、使わない機能や形態が消滅するかといえばそうでもなく、それは個性として、その生き物の特徴として残るのである。

人の目から見たら無駄にしか見えぬものも、それぞれの個性である。個性は思いがけぬ時に、その有効性を現わすものだ。何の役にも立っていないと思われる個性を持った人が、別の面ですぐれた素質を持っていると、その2つは相互依存の関係にあるのではないかと、思える。何の役にも立っていない、と思われる個性の裏に、実はすぐれた才能がひそんでいるのだと思う。すぐれた才能を持った人は、しばしば際立った個性を現わすものなのだから。

サクラバハンノキのひこばえはいかにも見苦しい。全部刈り取ってやったら、きれいさっぱりするだろうと思う。しかし見苦しいだけの個性ほど、見事な才能を発揮するものである。藁(ひこばえ)もいつかきっと、その実力を発揮してくるに違いない。

(阿部良司)



←サクラバハンノキの幹



糠塚山→

ゲーテ



ニ 生きるための論理

一

わたし達がこの世に処してゆくうちには、随分いろいろの問題に出逢います。自分一個に関する問題もありましょう、対社会の問題もありましょう。いずれにしても、そういう問題に出逢った時に、どうしたらいいか。つまり、その問題をどう取扱ったらいいか、ということがわたし達の一番苦しむことであります。そこで、ある哲学者は申しています——人生というものは唯だそういう問題を解決すること、そのことのうちにある——と。この考え方は確かに当たっていると思います。人間の精進とか努力とかいうものは、随分多種多様に岐れていましょうが、要するに、こうした問題にぶつかって行って、それを自分自身の力で解決することにあります。そして、そこに、その人一個の存在価値があるのではないのでしょうか。

よく人生は悲しいもの、寂しいもの、と考える者があります。又人生は飲ばしいもの、嬉しいものとする人もあります。しかし、悲しくても、嬉しくても、問題を解決しようと努力せねばなりません。ショウペンハウエエルという人は「生くことは苦痛だ」といいました。フィヒテという人は「生くことは浄福だ」といいました。二人の説は全く反対の立場ですが、二人とも自分に与えられた問題を解決するために一生を捧げました。人生は悲しい、人生は飲ばしい、ということは努力の結果から出たもので決して努力する前に考えることではありません。努力の結果から悲しいと観るのは、そこから彼れの人生観を樹てたのです。その人生観によって、生きようとするのは唯だ彼れのみがよく為すことです、だから、わたし達でも、問題を解決して行った結果、人生は悲しいものといったとて、敢えて差支えありません。ゲエテという独逸の文豪が「ファウスト」という戯曲の中で、一体この世界の一番初めに何があるのか、という問題に対して面白い解決を与えています。即ちゲエテはファウストという大博士の口をかりて、初めにあるものは語^{ロブス}ではない。意^{フゴロ}でもない。力^{ワザ}でもない。業だ。初めにあるものはどうしても業だといっています。全くこの業です。業があるから、はじめてわたし達の生活が切り拓けて行けるのではありますまいか。

そこで、初めにかえて、問題に出逢って、その解決に努力することは、つまり「初めに業がある」というのを説明するわけです。が、ここに一層困難な事柄が起

(次ページへ続く)

って来ます。それは如何にして、この自分の前に横わっている問題を解決したらばいいかということです。これを少し六つかしい言葉でいうと、wie(何故か)の問題の解決と申します。

しかし、wie 問題に対する解決法は、あれだ、これだと簡単にいいえられません。またそう簡単にいいえられるようだったら、つまらないものです。いろいろあって、しかもそのいずれの方法でやってもいいという所に努力甲斐があるのです。どう考えて見ても、このことばかりは、そうあって欲しいものです。そこで、私がここで申上げる方法も又一方法にとどまるのです。いや、方法であるかどうかそれすらわかりません。最後は矢張り一個人の問題となるのですから、他からああだこうだといっても価値のないことです。

とにかく、私は私一個の立場から私の愚見を申上げて見ましょう。

いうまでもなく、問題が問題として成立する場合は、(殊にわたし達の身边を襲う問題としては)多く一般に論理学などでいうデレンマ(両刀論法)の形に於いてです。即ち「甲たらんと欲すれば乙たらず乙たらんと欲すれば甲たらず」といった形です。例の重盛式の煩悶です。実際のところ、このデレンマ位、古来、人を悩ませたものはありますまい。日々の新聞記事の大部分はこのデレンマの所産であるといっても決して過言ではありません。「甲たらんと欲すれば乙たらず、乙たらんと欲すれば甲たらず」——全く進退ここに谷るわけです。この難局をどうしたら切り開いてゆけるか。ある人はこの場合に「時が自然に解決して呉れる」といって平然としています。このやり方も確にいいと思います。これを回避と見れば悪い方法でしょうが、「自然的推移への努力」と見れば、これに越したいいい方法はありません。スピノザという哲学者が、「事物は持続の相に於いて見ずに、永遠の相に於いて見よ」といいましたが、これは確に明言だと思えます。永遠の相に於いて見るということは、問題を回避したり、放棄するものではありません。何処までも問題に即して行って、しかもそれを永遠即ち長く引き伸した状態で見るのです。長く引き伸した状態で見るというのは問題の中に必然性を見出すことです。必然性を見出すということは、問題の存在する価値を認識するのです。もっと平易にして見れば、問題の起る点をよくよく考えて、それが全体としてどう動いているかを識ることです。「全体として」これが大へん大切な見方です。問題をそのまま捉えるものではありません。「全体として」です。しかし繰返していいますが「全体として」問題を捉えるということは、問題から離れて見るということではありません。ここが一番大切なところで、又一番誤解され易いところです。スピノザ自身についていって見れば、彼れは一生孤独

(次ページへ続く)

のうちに寂しく暮しました。ことに異教徒として迫害を加えられながら、故郷を追れて、この世のあらゆる苦酸を彼れは具に嘗めました。しかし彼はすべての事件を、永遠の相に於て、見てゆきました。随って、彼れはデレンマに陥った場合によく、デレンマの真相を識ることができました。彼の四十有余の短い生涯の終る時には、一切のデレンマが皆彼れには必然化されていました。私はこの永遠の相に於いてみる方法を大変いいことだと考えています。しかし、ここに私が申し上げようとするのは、これではありません。些かそれと相違しています。

二

これからいよいよ「生きるための論理」の本論へ這入ってゆきます。が、ここにちょっと、お断りしたいのは、この「生きるための論理」という命題です。この命題そのものから受ける直覚的な感じは、生きるために必要とする論理という具合になりましようが、ここではそんな実用的な実際的なためでは決してありません。これを少し六つかしい言葉にしていえば、「生活の手段としての論理」という意味でないのです。手段という意味に論理を解する哲学者も随分沢山あります。たとえば、先年物故した米国のウィリアム・ジェイムズという人はこうした考え方をした人で、自分の哲学をプラグマチズム(実際主義)と言っていました。一体、米国には彼れの流れを汲んでいる人が沢山おります。が私はそういう考に与しないのです。それでは「生きるための論理」とは如何なる意味のものか。又、如何なる意味に解するをもって正当とするか、という問題が当然起ってきます。私はこれを「生きるために必然要求せられる論理」と解したいのです。「生きる」ことが先か、「論理」が先かと問われれば、勿論生く方が先きだと私は応えます。しかしながら、生くということは唯だのんべんくらりと二六時中をすごすことではありません。どうしても、何か生きてゆく上に必要とされる対象を見出してゆかねばなりません。そして生く対象を見出す働き、それこそ人間の間人たる本領であるところの思惟の力です。パスカルというフランスの哲学者は、「人間は葦よりも弱いものだ。しかし、思惟する葦だ」といいました。まことに人間は不幸か幸か「思惟する葦」です。随って、一日生くということは一日何物かを考えているということです。デカルトならずとも Cogito, ergo sun(我れ思う故に我れあり)です。

さて、かように思惟するべく運命付けられた、吾々人間が生きる上に必然要求せられる考え方——それがここでいう所の、「生きるための論理」なのです。(これについてはまだ申し上げたいことが沢山ありますが、一とまずこれで打ち切って置きます。)

そこで、こういう具合に思惟しつつ日に生きてゆく上には、思惟の型が思惟のために必要となって来ます。哲学の方ではこれを範疇(Categorie)と申しています。範疇などという大変六つかしいように響きますが、これをもっとも易しくしていえば、考えてゆく上には、どうしてもなくてはならぬ一つの型ということです。つまり、考えるということの最後は判断を下すということになりますが、その判断の形式が、とりもなおさず範疇なのです。まあ、そういうものだと思って戴きたい。全く、範疇の意義は中々解り難いものです。一言にしてしまえば、簡単に解り易いでしょうが、それだけ多くの誤解を招くものです。しかし、これはどうも致方ありません。それで今までにどんな人がどんな風に範疇を樹てて来たかといいますと、まず大哲カントが4系統12の範疇を樹てました。これも中々難解なものでありましてここで、一口に申上げるわけにはゆきません。詳しくは、カントの「純粹理性批判」という書を繙けば、そこに書いてあります。しかし、初めての方などには故村岡省五郎の「知識の問題」(カント認識論の解釈)がいいと思います。これは大変易しく書いてありますから、これをこの種の問題に興味を有つお方におすすぬ申します。

カントの4系統12の範疇から因果だけの範疇を採って、残りの11を全部捨ててしまった人はシヨベンハウエルです。これには大変意義があると思います。というのは、一体カントの12の範疇なるものはどこまでも思惟そのものための範疇であって、私たちの生存とか生活とかにかかわらないものです。随って、こういう範疇は、現在如実に生きつつある私たちには、交渉の少ないものとなります。私たちの判断の形式ともなるべき範疇は、そのままにして人間の生存の範疇となるものにならねばなりません。こういう範疇こそ、真に私たちの求めてやまぬものです。ファウストがいったように、「初めに業ありき」の業する私たちが、判断を下すべき形式としての範疇は、それならば、如何なるものか。畢竟するに「生きるための論理」の中心問題は偏えにこれにかかっているのです。



←村岡省吾郎「知識の問題
(カント認識論の解釈)」
大正10年6月5日
岩波書店

陶山 務「生きることの論理」→
昭和2年3月25日
武蔵野書房



白坂正治氏よりお便りをいただきました。2回分まとめてご紹介します。

月報、号を重ねて第50号のご刊行、真におめでとうございます。貴誌と私との結びつきは“田部重治”でしたが、多くの人が集い来るのは懐の深さではないかと思ひます。人は誰もが感情を持ち、呟きたい衝動に駆られている。駆られて吐息ひとつを時の空間に投げてみても、返り還るのは至難。なぜならじむ生きざまは UFO キャッチャーのように捉えられないから。感情感覚が活字に映り、読者のまなこに泳ぐ。悠々とのびやかに泳ぐ。時には、けたるさを枕にして泳ぐ。河は山になり、山は谷になる。湧き出づる表現の涙に濡れながら。貴誌の紡ぐドラマに終わりはない。良い1年をお迎え下さい。

2017年12月20日

遅れましておめでとうございます。御賀状ありがとうございました。“わが家の2017年”を拝見しますと、御家族それぞれの日々を過ごされていても熱い確かな絆が感じられてすてきですね。したい何かを行動と結びつけるのは案外難しいと思ひます。阿部様の多方面に於けるきっかけ作り、場の提供は尊いです。良い1年になりますように。本年もどうぞよろしく御願ひ申し上げます。

2018年1月9日

阿部良司より、巻末のテーマに関してこの場を借りてひとこと。

「小さな旅クラブ 鹿沼」の創設を一番喜んで下さるのは白坂さんだと思います。紀行・文学、めぐるめく自然、社寺に見る歴史、思いもよらぬ出会い、彷徨する思索、すべてのことが旅に始まるのだと思う。そのことを教えてくれたのは田部重治であり、今後も折にふれ、田部先生の残された山旅、自然、散文詩、哲学、それぞれの著書に学びながら、「心の行方を追ふて」「涯てしなき道程」を歩き続けて行きたいと思ひます。

(阿部良司)



私たちは鹿沼三十三観音巡礼を始めた。お寺やお堂の在処を探し、観音像の行方を追う。その小さな旅の中でさまざまな出会いがある。出会った人々のさまざまな関係を知る。同じ鹿沼ではあってもこのいなかの人々の心の温かさにふれる。私たちはいかに、鹿沼のことを知らなかったであろうか。いかに鹿沼の人々を知らなかったであろうか。

山についてもそうだ。地図に名前を書いてない山の名前を私たちは知らない。それぞれの山にどんな谷があり、どんな滝があり、どんな樹々があり、どんな草花があるかを知らない。そして麓にある神社やお寺の歴史を知らない。私たちはもっと鹿沼のことを知りたいと思う。私たちは郷土鹿沼の好きな同志として集い、鹿沼の自然や歴史を学び、新たな人の交わりを求め、親睦を深め、お互いに向上することを目指し、鹿沼やその周辺に出掛け、鹿沼の内から外から郷土を見つめ、鹿沼の誇るべきものを探し、守るべきことを知り、郷土を愛し続けたいと思うものである。私たちは、ここに「小さな旅クラブ・鹿沼」を設立する。

会員・設立発起人名簿

赤羽根幸子	小森勇次	福田宜男
飯野かをる	小森知子	福田明子
石川さやか	小森あやか	松本真由美
石崎隆史	櫻井節子	山口龍治
石崎裕子	佐々木 茂	和田尚子
稲葉幸枝	佐々木伸二	和田翔一朗
祝 純子	塩入宏行	渡邊真知子
小川真司	塩入佳子	阿部良司
小川恵美	白坂正治	阿部みゆき
亀山千尋	津吹記代子	
神田敏範	西澤美智子	
神田敏子		



無言の抵抗。黙っていることで、ものごとに対する反論を表わそうというもの。さまざまな活動をしたり、論説することに対して何も意見がないことは、それがあって当然のように思われている、と捉えればよいことかもしれない。こちらはえらい苦勞して活動していても、傍からはた、それが普通のこのように見えるのは幸せなことである。しかし、一方でそれは無言による抵抗と捉えることもできる。人の活動や論説に対して批評したり反論したりすることは、その人を傷つけることになるから黙っていてやろう、という気遣い、そしてまた争いは避けようという意識からである。あるいはそもそも、論評の対象にならない、つまり無視しているのが実情かもしれない。それでも一部の方ではあるものの、本誌を読んだ感想を寄せて下さることに対して、本当に感謝しております。また、ハイキング等の感想や報告等、またそれぞれの研究成果をお寄せいただけることは、本会に対する応援であり、感謝申し上げます。

このように思惟する中で、「小さな旅クラブ 鹿沼」の設立は、本誌の読者諸氏の意見を探る良い機会となりました。「入会申込書」の提出は最も力強い応援ですから。(A.R.)

入会申込お願いします。今年から宜しくお願いします。(K.C.)

ご無沙汰しております！ 年度末になり、毎日バタバタしています。「小さな旅クラブ 鹿沼」の設立に同意し(≧▽≦)入会します(≧▽≦)。しばらく参加できないかもしれませんが…。サッカーの日程がはつきりせず、きっと息子が高校生くらいになるまで、参加は難しいかもしれませんが、よろしくお願いします(≧▽≦)。(W.N. W.S.)

こんばんは。お世話になります。入会させていただきます。(F.A.)

遅くなって申し訳ございません。明日、お持ちいたします。(T.K)

すみませんでした！ もちろん入会です。宜しくお願いします。(I.S)

代表・事務局
実行委員

阿部良司(鹿沼三十三名山探検)
祝 純子(リーダー、企画、会計)
石崎隆史(交通、情報)
西澤美智子(社寺・史跡巡り)
石川さやか(ハイキング、鹿沼三十三観音巡り)
佐々木伸二(山岳・鉄道・歴史)
津吹記代子(骨董市、陶器市、博物館めぐり)
阿部みゆき

会報

小さな旅クラブ 当面の活動計画（案）

4 / 15 (日)	「鹿沼・鹿沼城探検」（鹿沼学舎） 紫雲山千手院～拳骨山（坂田稻荷奥社）～岩上山～雄山寺 ～御殿山～今宮神社～坂田稻荷神社
4 / 22 (日)	「鹿沼・石裂山」 加蘇山神社より千本かつらを経て主峰月山へ (アカヤシオ、フタバアオイ、ヤマドリソウ、ヤマエンゴサク)
5 / 6 (日)	「奥多摩・六ツ石山」（ヤマナシ） 奥氷川神社参詣
5 / 20 (日)	「日光・黒岩尾根（行者堂～児子ケ墓～黒岩）」 滝尾神社参詣 (ズミ、ヤマツツジ、トウゴクミツバツツジ、シロヤシオ)
6 / 10 (日)	「西大芦・古峰原峠より行者岳、唐梨子山、地藏岳 を越えて夕日岳へ」（鹿沼学舎）(クリンソウ、ミヤマザクラ)
7 / 1 (日)	「日光・湯ノ湖畔と刈込湖、切込湖、涸沼」 (イチョウラン、サンリンソウ、ミツバオウレン)
7 / 15 (日)	「尾瀬・アヤマ平と尾瀬ヶ原」
8 / 4 (土) 5 (日)	「日光・男体山登拝祭」 日光二荒山神社中宮祠・奥宮参詣
8 / 19 (日)	「日光・赤岩滝」
9 / 9 (日)	「日光・戦場ヶ原」
9 / 23 (日)	「永野・三峰山」（鹿沼学舎） 出流山満願寺参詣
10 / 21 (日)	「日光・丹勢山と裏見滝」 清滝寺・清滝神社参詣
11 / 4 (日)	「那須・八溝山」 雲巖寺、大雄寺、那須神社参詣
11 / 18 (日)	「西大芦、八岡・鹿ノ入・小鹿ノ入、史跡めぐり」（鹿沼学舎）
12 / 16 (日)	「那珂川・尺丈山」 唐の御所参詣、小砂焼見学
2019年1月	「下野風土記のみち、東武野州大塚駅～」R小金井駅 東武野州大塚駅—大神神社—下野国庁跡—蓮華寺 —下野国分寺跡—栃木県立しもつけ風土記の丘資料館 —琵琶塚古墳—下野薬師寺跡—」R小金井駅
2月	「足利・行道山～両崖山」 行道山浄因寺・大岩山最勝寺・織姫神社参詣
3月	「西大芦・羽賀場山からお天気山」（鹿沼学舎） 長安寺・大芦神社・神舟神社参詣

（企画立案：阿部良司）

小さな旅クラブ・活動目標

- ① 月に1～2度のハイキング、社寺史跡めぐり
- ② 鹿沼三十三観音めぐり
- ③ 陶器市、骨董市の見学、ピンポイントの植物観察等の小さな旅
- ④ 鹿沼三十三名山の選定
- ⑤ 年に2～3度の学習会
- ⑥ 季刊「鹿沼の自然・栃木の旅」の編集発行



鹿沼の自然・栃木の旅 会報第51号

2018年4月発行

小さな旅クラブ 鹿沼

鹿沼市戸張町1818

(クリーニングハウスあべ内)

発行人 阿部 良司

携帯 090-1884-3774

FAX 0289-62-3774

携帯 ☎ shizenclub.2006@docomo.ne.jp

E-mail a2b5r7j7@one.bc9.jp

ホームページでもご覧になれます→

クリーニングハウスあべ

